

# 伝え

日本口承文芸学会  
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28  
國學院大學文学部 花部英雄研究室  
TEL:03-5466-0224 (直通)  
FAX:03-5466-0368 (日本文学資料室)  
E-MAIL: koshobungei@mail.goo.ne.jp

## 学会代表を引き受けるにあたって

花部 英雄

小林一茶の句に「目出度さも中位なりおらが春」というのがある。老境に新年を迎えた感慨を述べたものであろう。学会代表としての所信の表明をあれこれ考えているうちに、この句が浮かんできた。そう言うと、不遜なあるいはもったいを付けたように聞こえるかもしれないが、今の率直な感想である。

歴代の<sup>そうそう</sup>錚々たる顔ぶれの会長に並んで、その末席に名を連ねることであるからして、名誉で晴れがましいことにはちがいないが、ただ手放しに喜び浮かれている場合でないことを、昨今の学会事情から受けとめていく。去る3月21日の新理事会で、代表にどの声があったとき、自分はその任ではないことを十分に承知していたけれども、直後の挨拶で、大学に身を置き、研究室を持っている環境が引き受けざるを得なかった、と述べたのはその真実な思いであった。あらためてこの紙面を借りて、学会の事務局、代表を引き受けるにいたった現在の心境を確認して、所信の表明としたい。

前の代表である大島建彦会長の場合、事務局を小澤昔ばなし研究所に置き、中村ひろ子さんが運営事務を引き受けるという、変則的な体制で行うことを決めた理事会に同席していた。単純に大学に事務局を置くというシステムが難しくなっている現状がある。そうした中で引き受けはしたものの、次の事務局にどのように引き継いでいけばいいのかというのが、目下の心配事である。理事会の知恵をいただきながら、この2年間でぜひとも解決して行かなければならない。

そんな経緯もあって、奈良教育大で行われた理事会で、東京に事務局を固定するのではなく、それ以外に動かしながら学会を運営することができないか、という卑見を述べたのであるが、議論百出で収拾をはかるような状態ではなかった。あらためて問題の根深さ、困難さを確認したのではあるが、しかし手をこまねいて待っているわけにはいかない。なんとかして現状を打破していかなければならない。

問題の性格上、淡々と現実的に問題を処理していくということにはならないだろう。いま学会とは何か、誰のためにどのようにあるべきか、といった基本に立ち返りつつ、しかも学会の未来や理想を熱く語りながら、方向を模索していくようではなければならない。ぜひとも会員みなさまのお知恵やご支援をお願いするしだいである。

(神奈川県)



第33回大会公開講演

説話のシルクロード  
—世界の口承文芸と奈良—

竹原感滋

口承文芸に「心のふるさと」を求めようとするのは自然な欲望であろう。口伝えの話に接することによって心のひだに触れる情感を養っていくことは、精神の成長にとって重要な役割を果たしている。問題は、そこで養われる情感が排他的なものであってはならないことである。ナショナリズムがひきおこす問題もその点に存している。

竹原感滋氏の講演「説話のシルクロード」は、一般に日本固有の話のように受けとめられている「癩取り爺さん」の昔話の類話を、まずヨーロッパの伝承の中に探り、その後には朝鮮半島、モンゴル、新疆ウイグル、浙江省、雲南、ベンガル、ペルシア、トルコ、カメルーンというように辿りながら、そこに「説話のシルクロード」という言葉で表現される「つながり」を見出そうとする。長年の研究の蓄積にもとづく、豊かな実例の紹介（音声資料を含む）を交えた講演を聞きながら、心が開かれていく開放感を実感した。

多くの類話の中から、竹原が共通するものとして取り出すのが「頬や背中に癩がある異形の者が、どこかに出かけて行って神々と出会う」というモチーフである。そこにさまざまな宗教民俗的な味付けが加わることにより、それぞれの地域で楽しめる多様な説話となっているわけである。癩取り爺さんは日本固有の話ではなく、「民族や言葉の壁をこえて、したたかに伝承・伝播して」いることを竹原は主張する。民族の摩擦が際立つ状況の中で、「心のふるさと」のつながりを見出していくための比較研究の重要性を教えられる言葉であった。

(川森博司・兵庫県)

第33回大会公開講演

うたとは何か再考

藤井貞和

「民謡」と現代の詩」「フルコトのなかの歌謡（起源的性格その一）」「うたう」「うたわない」、ウタの語源、うた状態」「物語と「うたううた」「うたう五七五七七（2例）、物語に聞こえる声とは」「十一世紀初頭での今様歌」「詩的言語社会批判」「ケニング、ヘイティ、類推の論理—言語問題」「個人の起源としての和歌、現在の起源としての歌謡」の項目が、当日の印刷物にたてられている。

「歌謡」「民謡」「詩歌」などではなく、「うた」として起源を推論してゆく。

日本文学の中心に「うたわないうた」が据えられてきたことを思い出した時、藤井の「うた」への問いかけが、「口承文学」という藤井の主張と重なりつつ我々に迫ってくる。それは「物語す」というサ行変格活用の動詞が用いられた時に「物語」が行なわれていないことをも思い出させるし、『口承文芸思考』（昔話と伝説と神話）において、「昔話」は「ムカシ・説話」であり、「ハナシ」は「用法が少しく弛んで」いる今日のそれとは同義でないと柳田が定義していることをも思い出させる。柳田は、「語り」の語を手がかりに「かたりもの」や「うた」をも考えた（「口承文芸とは何か」）。

それにしても、アイヌや南島の資料を視野に入れつつ文学の始原に近づこうとする学問のスタイルは、この学会が創生期に有していた大きな可能性を現在に繋ぐものである。研究例会が分科会と同義に理解され、設定されたテーマに身近な会員のみでの自閉した空間になりがちだという傾向に、自分も加担していないか、反省させられる。

(野村典彦・東京都)

## 第33回大会

### 奈良伝説散歩

今年の口承文芸学会は奈良大会ということで、公開講演では「説話のシルクロードー世界の口承文芸と奈良ー」と題して話させていただいたが、懇親会が猿沢池のほとりにあるホテルで行われることになったので、永池健二氏の発案でその近辺を散策する「奈良伝説散歩」が企画された。

学会が開催された奈良教育大学から路線バスで近鉄奈良駅まで出て、駅前広場の「行基像」からスタートした。案内した伝説は、コース順に挙げると、「東向き」の由来、「餅飯殿」の由来、采女神社の由来、十三鐘の石子詰め、不審ヶ辻の鬼である。

実際に歩いてお話の核になる名所旧跡を見ていただき、お話をより深く実感してもらえたと思う。

「むかし、帝の寵愛が途絶え、世をはかなんだ采女は猿沢池に身投げをした。その時脱いだ衣をかけた柳があゝの「衣掛け柳」や。采女を祀る神社は、池を見るに忍びないので池とは反対の方向を向いているのや。つまり愛しい帝のいる平城宮のほうを今もなお向いているということや。」

「むかし、寺子屋でお習字を習っていた三作は、鹿に半紙を食べられたので、とっさに文鎮を投げたところ、鹿に当って死んでしまった。奈良では鹿を殺せば石子詰めが掟（おきて）や。三作の母親は三作が埋められたところに、もみじの木を植えて供養した。それ以来「鹿にもみじ」という取り合わせが始まったそうや。」

伝説散歩に際しては、「ならまち民話地図」を配布し、裏面に載せたテキストを現地で声に出して読んでから、伝説の背景などを解説したが、浅学菲才の私には荷が重すぎた。

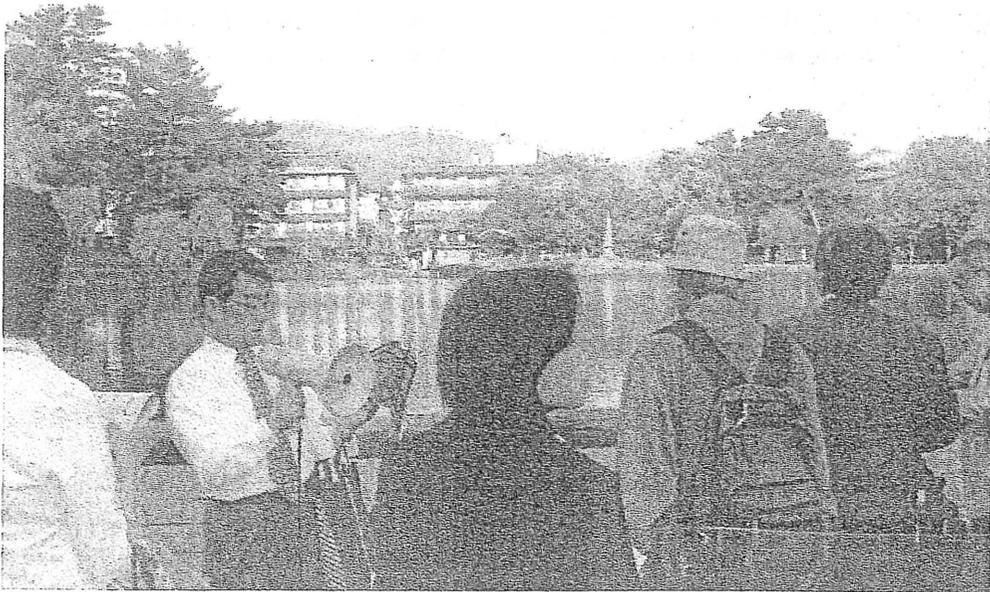
「餅飯殿の由来」の話では斎藤純氏に餅飯殿商店街と修験道の講の関わりについて解説していただいた。また、「不審ヶ辻の鬼」の話では丸山顕徳氏に元興寺にまつわる鬼「ガゴゼ」の由来などについて解説していただいた。

この伝説散歩には会員と一般市民を含め 60 名余の方々に参加してくださり、その後行われた懇親会で喉を潤し、散策の疲れが癒された。

なお、「ならまち民話地図」は、丸山氏とともに主宰する「比較民話研究会」が調査した報告書『奈良市民間説話調査報告書』に基づいて作成されたものである。ご覧になりたい方は、私のホームページでも公開している。

(<http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~takehat/>)

(竹原威滋・奈良県)



(猿沢池のほとりで案内中の竹原威滋氏)

### 第33回大会研究発表

#### 文化の境界を越える —「Rakugo」の(不)可能性—

ムズラックル・ハルト

英語落語は、故・桂枝雀によって演じられ、その後若手のプロもしくは素人によって、継続されている。英語表現を通して、落語は「世界の Rakugo」になれるのかという問題設定のもとに、発表者は落語の可能性／不可能性を問う。

発表者は、まず枝雀の英語落語への情熱、そして日本社会における「英語支配」という状況を確認したのちに、英語落語の構造を、マエオキ、マクラ、本題、オチについて概観した。また、外国人聴衆へのアンケートの結果をもとに、英語落語の受け取り方の一端を紹介した。さらに発表者は、特研究対象として特に関心をもっているジャンルとして「怪談斬」を挙げて、枝雀が、「怪談斬のパフォーマー」という一面をもっていたにも関わらず、英語落語では意図的にとりあげることを避けていた可能性があることを指摘した。

最後に、海外メディアにおける落語批評がとりあげられて、海外では、批判性・社会性が落語に乏しいと受け取られる可能性があるという点が指摘された。質疑応答では、仏教説話との関係から笑いの質を理解すべきというアドバイスなどが出された。

(真鍋昌賢・大阪府)

### 第33回大会研究発表

#### 近代日本における「仏教音楽」の成立 —俗謡」から分断されたご詠歌—

新堀敏乃

民衆的な仏教の祈りの形である「ご詠歌」が、1920年代から30年代に、複数の団体によって意識的に創られ、「仏教音楽」として制度化されて成立したことを、近代日本の文化変容の現象として位置づける研究発表であった。「ご詠歌」の制度化とは、一つにはこれを日本の正統的な伝統音楽として文化的

価値を付与することであり、もう一つは、修行として階級制度を導入し、習得者を階層化することであった。その過程は、遍路が唱えた和讃などを「乞食歌」、「俗謡」に影響された非宗教的なものとみなして排除することを含んだ。「ご詠歌」の成立は、「行」に対する社会の変化と、西洋音楽の導入に伴う近代日本の音楽観の変化に応じ、「正しい」音楽と「俗なる」音楽の再編成の中で行われた、と理解されるだろう。

「伝統の創出」といった用語の利用についての議論があったが、その概念は慎重に活用すれば、変化を描出するのに有効だと思われる。今後は、「ご詠歌」の成立が民衆の祈りや音楽観にどう影響したのかを、より生き活きと表現することを期待したい。

(難波美和子・熊本県)

### 第33回大会研究発表

#### 方言研究と昔話研究

高木史人

昭和初頭、方言研究と昔話研究は協同して進められた。高田十郎『なら』と東條操『方言採集手帖』から明らかにされたのは、方言研究「再興」期と昔話研究「勃興」期は重なり、両者を束ねたのが柳田國男である。昭和6年、國學院大學方言研究会発会。機関誌『方言誌』からは民俗学が強く意識され、方言採集と民俗採集が同時に行われていたことがわかる。

その後昭和15年に日本方言学会が発会し、柳田は初代会長に推された。柳田は方言研究と昔話研究に同等の労力を費やしたのである。両者に共通するのは「ことば」。柳田にとって両者は個別の研究対象ではなく、「ことば」を考えるための、あるいは人々の生き方をより「幸せ」にするための一続きのものであった。

はたして両者は大きく乖離していくが、柳田の構想した言語芸術論は未完の儘に現し続けている。この問題群を引き受け、思想として昔話集を考えていく時期に来ているのではないかと締めくくった。

発表後、会場から事例が複数紹介され、いずれも昭和40年代であった。研究史として偶然ではないと思われた。

(達志保・愛知県)

第33回大会研究発表

イマカンの謡とシャーマン神歌

于 曉飛

ホジュン族の歌謡で「イマカン」と呼ばれる歌について、1930年代の凌純声の採取資料と1980年代の採取資料を比較・考察。30年代には物語を歌う上演形式があり、周辺民族の影響やシャーマン神歌の痕跡がうかがえた。また、80年代のものは記録や記憶からの復古であることを明かにした。ただし、ホジュン族の所在や周辺民族との関係、その歌謡の概観とイマカンの特色、また、凌純声の業績や位置づけなど基本的前提の説明がなく、専門分野が遠い聞き手（報告者を含む）には理解・評価が困難だった。これは専門家には自明な事柄で、知識のない聴衆こそ問題かもしれない。とはいえ、聞き手の水準を付度できないのというのは、敷衍すれば発表する学会において共有すべき論点をつかんでいないともいえよう。ただ、今回は国内国外の発表が同じ会場で、この点は発表者に不利だったと思う。会場からは、上記のような説明不足を指摘する意見があった。また、発表者の用いた「定型リフレイン」と「不定形リフレイン」の概念について、内容・奏法について質問があった。（齊藤純・奈良県）

第33回大会研究発表

南島における陰陽道系説話の展開

小池淳一

まず陰陽道書『篋篋（ほき）』の由来を語る説話を挙げ、陰陽道系説話の宗教文化的な特徴と価値を概観。ついで、こうした説話のうち、安倍晴明と蘆屋道満の闘争譚が南島の祖先祭祀行事「晴明祭」の由来に結びついている例を取りあげる。その関係は行事の内容や歴史からみて本来的なものではないが、かえって、そこに、結びつけを促した陰陽道の啓蒙活動を看取する。また、喜界島のソウシ（陰陽道書）由来譚を紹介。これに、①シャーマニズムに関する日光感精説話中に位置を占める例、②『篋篋』

由来説話のうちの海亀報恩や聴耳の説話が展開した例を指摘する。こうして、南島の基層的な民俗に、二次的に陰陽道の知識が加わって展開した民俗を提示し、その担い手を想定した。以上、展開が跡づけにくい南島の陰陽道の歴史に「説話」という手がかりを示し、原像にのみ目を奪われがちな南島の宗教文化研究に、発展という視点を加えたものといえよう。会場からは、より詳しい現地調査を望む意見や、トキ・ユタなど宗教者の違いと説話の関係などの質問があった。（齊藤純・奈良県）

第33回大会研究発表

Aomommomo（われつまびらかに述ぶ）  
—ユカラの一人称叙述について—

荻原眞子

アイヌの英雄叙事詩ユカラに繰り返し登場するaomommomoという言葉がある。「はしよらずに詳しく語る」という意味だが、叙事詩の中では同じ描写を繰り返すことを省く場合に用いられる。金田一京助の記録になる「虎杖丸」に1ヶ所、別伝に1ヶ所出てくるこの表現を検討し、叙事詩の中ではこの語が同じ描写を繰り返すことを省く場合に用いられているとする。

ここで発表者は「われつまびらかに述ぶ」という場合の「われ」がだれであり、述べる相手がだれかを問題にする。語りの空間には語り手と聴き手がいるが、主人公の一人称語りという観点からすれば、物語の中では主人公が語り、他の登場人物がそれを聞く、あるいは一人の登場人物が語り、他の登場人物が聞くことになる。ここで熊の神謡における一人称叙述を取り上げ、人間に仕留められた瞬間、熊の「われ」は肉体を離れ、運ばれていく「熊」を遠くから眺め、見守ることに注目する。熊の神謡の一人称叙述はこの「われ」によってなされる。「われ」とは人間の意識的存在の原点であるところの自我であり、アイヌの口承文芸の底流にある普遍的な観念ではないかと結論する。

ユカラの叙述を「一人称」という場合、あくまでカッコ付きの一人称である。この問題に関しては議論の多いところだろうが、討論の時間がとれなかったのは残念だった。（齊藤君子・埼玉県）

## 第33回大会シンポジウム

### ウタとカタリ

#### —比較歌謡研究の現場から—

奄美の口承歌謡にみるウタ（短詞型歌謡）とカタリ（長詞型叙事歌謡）の位相—《烏賊曳き（いきやびき・いちやびち）》を例に—

酒井正子

同音という指標

—日本の中世芸能におけるウタイとコトパー—

藤田隆則

歌われる詩と歌謡

—19世紀のビルマの鼓歌の詩形式を例に—

井上さゆり

司会 永池健二

ウタとカタリという、日本の口承文芸における最も基本的な言語表現の二種の形式は、どう重なり合い、どこで分かれて来るのか。この二種の言語表現の異同を、実際の演唱の場の具体例を踏まえて比較検討することを趣旨とした本シンポは、専攻領域を異にしながら具体的な演唱の場における豊富な経験を持つ3人のパネラーの報告によって構成された。

酒井正子氏「奄美の口承歌謡にみるウタ（短詞型歌謡）とカタリ（長詞型叙事歌謡）の位相—《烏賊曳き（いきやびき・いちやびち）》を例に—」では、南島歌謡研究の立場から、同名同内容の歌が一方で長詞型の叙事歌謡として、他方では掛合いによる短詞型の歌謡として歌われるという興味深い事例が提示された。奄美諸島でもと船漕ぎの歌とされる「烏賊曳き」は、夜間の烏賊釣りに出漁した漁師が遭難するという内容を持つ秘曲であるが、沖永良部島では、それが対語対句を連ねた典型的な長詞型叙事歌謡として自己完結的な一人称の形で歌われ、徳之島では、4句体の短詞型歌謡として掛合いによって上下同句旋律で即興的にオープンに歌われるという。その成立について、酒井氏は、短詞型歌謡と類似型を持つ「舟イトウ」の存在を重視し、もと船漕ぎのイトウ（仕事歌）であったものが「あしび歌」に転じ、長詞型の叙事歌謡はその影響下に形成された可能性を示唆された。

藤田隆則氏「同音という指標—日本の中世芸能に

おけるウタイとコトパー」は、古典・民俗芸能の音楽学的研究の立場から、中世芸能としての能における演唱の具体例を下に問題提起された。能の構成では、旋律がなくシテが独唱で語るコトバと、旋律のある詞章を拍子に合わせて「同音」で歌うウタイとが交替で現れるが、それは元々「せりふのやりとり中心の演劇」でシテの独唱が主であったものが、多数のツレや専門の地謡が登場して同音で唱和する場面が肥大化したのだという。ウタイとコトバの交替が同音（唱和可能）と独唱（唱和不可能）の対立であり、それが歌い手と聞き手の参加態度を規定し、参加者の空間配置や演出にまで展開していくという指摘は、ウタとカタリを分かつ具体的事例として興味深い。

井上さゆり氏「歌われる詩と歌謡—19世紀のビルマの鼓歌の詩形式を例に—」は、ビルマの古典文学研究の立場から、その古典詩を事例として報告された。19世紀以前の王朝時代のビルマの韻文学は、「詩（カビヤー）」と「歌謡（タチン）」に分けられ、これまでこの二種の定義や区別を中心として研究が進められてきたが、両者の境界は不明確で、王に奏上する際のように「詩」が歌われる場合もあり、歌われるか否かだけで区別することは難しいという。その作詞法において、「詩」が明確な押韻形式の規則に従って作詞されるのに対して、「歌謡」が押韻に厳密ではなく、一定の旋律に歌詞を当てはめていく形で作詞されるという指摘は、ウタをウタウという行為と歌をツクルという行為がどこで分かれてきたのかという点で示唆的であった。

3氏の刺激的な報告に対して会場からも活発な質疑がなされた。事例への興味から、議論が個別の話題に集中し、全体化、総合化の方向に進み難かったのは惜しまれるが、古代文学や文化人類学、民俗音楽学などその立場において、ウタとカタリについての定義、位置付けに大きな懸隔のあることが改めて浮き彫りになった。

（永池健二・奈良県）

## 会員通信「小特集 口承文芸と企画展示」

伝説を展示する

—すみだ郷土文化資料館特別展での試み—

高塚明恵

すみだ郷土文化資料館は、昨年 2008 年に開館 10 周年を迎え、記念特別展として「隅田川文化の誕生—梅若伝説と幻の町・隅田宿（すだのしゅく）」を開催した。この特別展は、墨田区北部にある梅柳山木母寺（ばいりゅうざんもくぼじ）の縁起として語られる梅若伝説を題材としたものであった。

梅若伝説は、梅若丸という少年が主人公の、能「隅田川」でも知られる哀話である。京都北白川の吉田是房（これふさ）・花御前（はなごぜん）夫妻の一子梅若丸は、人商人（ひとあきんど）信夫藤太（しのぶのとうた）にさらわれ、隅田川のほとりで亡くなる。一年後、梅若丸一周忌の大念仏が行われているところに、花御前が息子を探してたどり着く。花御前が念仏に加わると塚より梅若丸の亡霊が現れ親子の対面を果たす、という物語である。

今回の展示を開催するに当たっては、二つの試みがあった。一つは地域に伝わる伝説を通して、墨田区北部地域の地域史を掘り起こすこと、もう一つは歴史・民俗・文学・芸能など複数の研究分野より梅若伝説という一つのテーマを総合的に展示すること、であった。

梅若伝説を中心テーマに取り上げた理由は、中世から近代の各時代を通じて、墨田区北部の歴史的、文化的な個性を理解する上で、有効な題材になると考えたからである。中世の木母寺周辺、墨田区北部の隅田川岸には「隅田宿」と呼ばれる町が存在し、古代東海道の道筋であった。つまり、かつてこの地域は人々の往来で賑わう中世の都市的な場であった。このような歴史的環境はこの地域が梅若伝説の

伝承地であることと無関係ではあるまい。また近世には、文人墨客を含めた多くの人々が墨堤（隅田川東岸の土手）を訪れた。隅田川東岸は江戸近郊の景勝地として名高かったが、当時浄瑠璃や歌舞伎などで上演され流行した「隅田川物（梅若伝説を題材とした一連の演目）」の舞台であったことも人々を惹きつけた一因であっただろう。それはやがて、向島に花街を形成させる遠因ともなった。

展示では全体を 5 章構成とし、梅若伝説の伝承地木母寺周辺の歴史的背景（第 1 章）、伝説を伝える絵巻をどう読み解いていくのか（第 2 章）、伝説は能や歌舞伎などの芸能にいかにか昇華され、巷間に普及していったのか（第 3 章）、また梅若伝説は日本各地に残された年中行事や民俗芸能といかに関係するのか（第 4 章）、伝説の舞台になった木母寺は近世・近代においていかなる機能を果たしていたのか（第 5 章）、について紹介した。

館内の学芸職だけでなく、館外の研究者にも協力を依頼し、それぞれの知識や研究成果を共有するために、1 年前より月に 1 度研究会を行った。その結果、展示内容は充実し、資料的価値の高い図録を作成することができた。しかしながら、各章個別には充実した内容となったが、梅若伝説という一つのテーマを、多分野を横断して融合させる展示ができたとは言いがたい。また各章の専門性が高くなり、一般の見学者に対して、展示内容・意図ともに伝わりにくくなってしまったことは否めない。

とはいえ、前述の二つの試みに対して一定の成果を挙げることができたと言える。一連の成果・反省点をふまえて、今後地域博物館における伝説など口承資料への取り組みについて、さらに可能性を探ってゆきたい。（東京都）

## 博物館における〈口承〉の可能性

高塚さより

博物館という場において、〈口承〉という問題は、展示の素材としてだけでなく、展示解説という面からも考えることができる。ここでは、小島民俗資料館という私設博物館を例に、博物館という場で〈口承〉の持つ可能性や必要性について述べてみたい。当資料館は、横浜市で代々農業を営む小島家の貞雄さんにより自宅の堆肥舎を再利用して昭和 55 年から始められた。小島さん自身が使用してきた農具を中心に様々な生活用具が展示されている。私自身、博物館的施設に勤務していることもあり、この資料館に興味を持つようになった。

ある日、「資料館の中で小島さんのお気に入りや来館者が興味を示すものを教えてほしい」という依頼に対して、次のようなお話＝解説をしてくれた。例えば、「オンガ」というこの地域特有の鋏については「これあのお、地（じ）が軟らかいからね、鋏でこうやっていちいち探らなくても、これでね。これであのお引っ張っちゃうんですよ、後ろ向きになって。ずーっと。これもこの辺の。（略）うん、そう。粟蒔いたりね、麦蒔いたり、よく使ったんだ。オンガ引くのは、麵棒が昼寝してるようにまっつぐ引かなくちゃいけないんだって。こうゆうふう。」と、写真のように実際に使うしぐさをしながら説明してくれた。また、農具屋については「やっぱり中田じゃないけどね。戸塚まで行くとあるんだけどね。そこはみんな土が重たいからね、全部鉄の鋏だったんだよ。」と教えてくれた。

地域において長年にわたり実際に使ってきた小島さんだからこそ可能な説明であり、こうした農具にまつわる民俗知は、〈口承〉だからこそ表現され、また〈口承〉というまなざしを持ってこそ浮き彫りにすることの出来た、小島さんに宿るリアルな知の在り様であろう。因みに、モノにまつわる口承的な情報の重要性は民具研究においても指摘、活用されている。小島民俗資料館には地元の小学生などが訪れ、当地域において、生活の延長線上にある、郷土を理解する場として一定の機能をしてきた。それは、ここで示したような、小島さんという生の人間の民

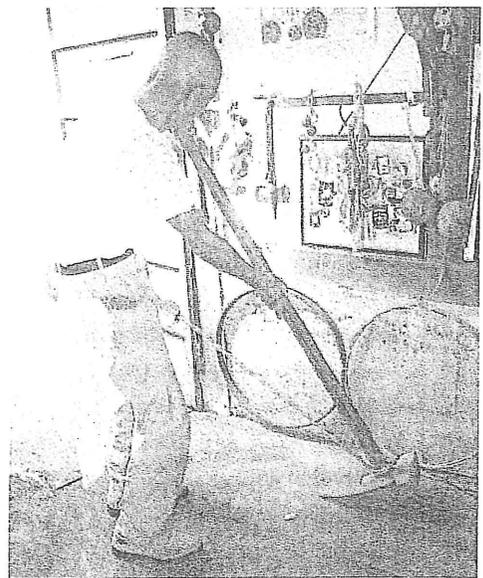
俗知が口承と身体に刻み込まれながら伝えられる場であるからと言えよう。

そしてまた、この民俗知は、小島民俗資料館という場において説かれ、小島さんや地域の人々の中に機能していくとき、「同郷人による民俗学」にも通じる民俗学的知としても捉えられると思う。ところで、公立の博物館では、こうした民俗知や民俗学的知は、どのように掬い上げられてきたのだろうか。

私の勤務先である江東区深川江戸資料館は、江戸時代の町並みを復元した展示施設であるが、口頭による比較的対話的な展示解説を行ってきた。オープンから 20 年以上が経過し、長屋のような畳・障子のある日本家屋に住んだこともない世代が増え、そこに置かれた生活用具を使ったことも見たこともない解説員が、同様の来館者へと解説するようになっている。

最近解説ボランティアの方から、展示室に置かれたモノを使ったり、着物を畳んだりする機会を設けてほしいと言われた。生活再現展示という場で、口頭解説をする者の中から、モノを（擬似的にでも）使ってみる必要性を求める意見が出ていることは興味深い。江戸の町並みという場で伝えるべきは、歴史学なことだけではないはずである。何をどのように伝えていくのかなど、「郷土で」を考えていくためにも、公立の地域博物館において〈口承〉の可能性や民俗学が果たしていく役割についても問い直していく必要を感じる。

（神奈川県）



（オンガを引く小島貞雄さん）

教わるための共同作業  
—地域と大学との連携—

飯倉義之

「地域に開かれた大学」「大学の知識の地域への還元」というスローガンが叫ばれて久しい。学問を社会的な営みとして自覚し、地縁という実生活上の縁で結びついた地域共同体の一員として振舞うこと＝地域との連携は、これまで以上に必要となってくるだろう。そうした場合、大学が蓄積した知識を資源として提供することは重要である。しかしそれでは大学側からの選択的な提供となってしまう、最悪の場合知識の押し売り、押しつけになる危険性を伴っている。連携とはそうした「一方通行の大盤振る舞い」の作業ではない。

大学が孤立した共同体として振る舞いがちであることは否めない。例えば、大学に毎日通う教職員や学生が駅とキャンパスとの往復に終始して、キャンパスのある地域のことは知らないし知ろうともしない、という事態はままあるはずだ。地域との連携とは、そうした無関心や没交渉を乗り越え、知識を与え合う営みであるはずだ。

そうした「地域との連携」のあるべき姿の模索として、地域に根を下ろした「社会教育施設」と、地域住民による「民話の会」と、文学部伝承文学専攻の「大学の学生」との、小さな講演会の試みを紹介したい。

國學院大學は渋谷区東4丁目の坂の上に建っている。入れ替わりの激しい渋谷区で、この丘の旧地名が常盤（磐）松であったことを知る人はもはや少ない。そうした渋谷根生いの渋谷っ子、渋谷という土地の歴史を身体に刻み込んだ方々が「渋谷民話の会」という会に集っている。同会は、國學院大學に学び、現在國學院大學栃木短期大学講師である野村敬子氏を中心に編まれた『渋谷ふるさと語り』『渋谷むかし口語り』（渋谷区、2001年、2003年）の聴き取り事業への参加を契機に結成された。同会の主な活動は、学校や公共施設での語りを通して、渋谷の民話を次代へと受け継ぐことにある。

このたび野村氏の提言により、同じく渋谷の丘にある、塙保己一を記念する温故学会を仲立ちに、國

學院大學文学部日本文学科伝承文学コースの有志が、講演会のための団体として「國學院大學語りと伝承の研究会」を立ち上げ、来る12月6日開催の民話の会・温故学会・学生の会による講演会「水の渋谷の水の伝説」に向けて活動することとなった。

そのためにまず行なったのが、渋谷のフィールドワークである。民話の会の方々が身体に刻み込んでいる伝承の現場をめぐり、みる。それだけのことであったが、日々通っている「渋谷」という土地に対していかに無知、無理解であったかを思い知らされた。

地域と大学の連携の可能性は、生活の場としている地域の人たちから畏敬を持って学び、地域の日中だけのパートタイム生活者として知識を受け継ぐこと、そしてそうした知識に対して新たな意味付けを提供するという、教えあう営みにあるのではないだろうか。

渋谷の丘のささやかな試みを、地域との連携という大きな課題への第一歩としたい。

渋谷民話の会講演会

「水の渋谷の水の伝説」

日時：平成21年12月6日（日）

13:00 開場（入場無料）

場所：塙保己一史料館（温故学会会館）2階講堂

東京都渋谷区東2-9-1

※渋谷民話の会の「水にまつわる渋谷の伝説」の語りと、國學院大學語りと伝承の研究会による解説を行います。

（京都府）

会報委員会より

『伝え』は2月と9月の年2回発行です。会員の皆様の情報を反映したいと思います。これから先に行われる企画などを会員通信に組み入れてゆきますので、委員までお寄せください。今期2年間の委員は、石井正己、大島建彦、大島廣志、米屋陽一の4名です。

## 佐々木喜善と仙台

石井正己

佐々木喜善と言えば、『遠野物語』の話し手として知られ、ずっと遠野に暮らしていたかのような印象が強いが、『遠野物語』は東京時代の産物である。帰省してからの遠野時代には、ザシキワラシやオシラサマ、昔話の資料を集め、『奥州のザシキワラシの話』や『老嫗夜譚』などを残している。短い一生だったが、誰よりも早く、後に民俗学と呼ばれることになる学問を推し進めた。

しかし、晩年の4年あまり、家族を連れて仙台に出て暮らしていたことは、あまり知られていない。仙台への移住は土淵村長としての挫折が大きな契機になっているが、学問的に見れば、柳田国男との距離が重要であろう。2人はお互いの見解を深く理解しながらも、その溝は次第に深く、大きくなってゆく。そうした中での選択が仙台への移住だったにちがいない。誤解を恐れずに言えば、それは柳田からの離反を意味したと言ってもいいように思われる。

仙台へ移住して以降の活動は、それまでの遠野時代とはずいぶん違っている。遠野にいれば、一介の郷土研究者で終わってしまっただろうが、喜善は勇気をもって仙台に移住して、新たな実験を始めた。柳田は、収集者の仕事は未来の研究者のためにあるという思想を持っていたが、それを遥かに越えてゆくことになる。金田一京助は、喜善の没後、「日本のグリム」と讃えたとされるが、それでも喜善の業績のすべてを正確にとらえたとは言いがたい。ステレオタイプの評価では届かないところに、喜善の歩みは進んでしまったと見たほうがいい。

例えば、昔話集の古典とも言える『聴耳草紙』は、青森・岩手・秋田・宮城にわたる昔話を集大成したものである。その規模から言っても、一郡一島単位で昔話集を作るのがいいとした柳田の思想とは、ずいぶん異なる。しかも、その背景には、昔話は神話の零落ではなく、これから生まれつつけるという発想がある。昔話集の規模だけでなく、昔話をまとめる思想が、柳田とはまったく違っている。巻頭に並ぶ、柳田の「序」と喜善の「凡例」には、2人の違いが端的に表れている。

その他にも、新聞やラジオとの関係があげられる。『河北新報』に民俗に関する文章を熱心に寄稿し、一般の知識にしようとした功績は大きい。仙台中央放送局から放送した「東北土俗講座」は、東北の研究者と東京の研究者を集合させた画期的な試みであった。その他にも、自ら多くの講座に出演し、生の声で民俗学の意義を説いている。喜善は最新のメディアを使って、新しい学問を大衆化しようとしたのである。

また、東北帝国大学にいた喜田貞吉のリードで刊行された『東北文化研究』には、オシラサマやザシキワラシの報告を寄せている。それだけでなく、自ら民間伝承学会を組織し、全国の同志の協力を得て、『民間伝承』を発行する。質素な謄写版で、しかも2号で挫折したが、雑誌の重要性を認識していたことは間違いない。その名称から見ても、喜善の遺志が、後に民間伝承の会が発行した『民間伝承』に受け継がれたことは、もっと注意していい。

仙台という開かれた場所で、多くの人々の刺激を受けながら、晩年の喜善が達成した業績は、まだ十分に解明されていない。エスペラント語の講習会で花巻に2回招かれて、病中の宮沢賢治と長時間にわたって話し合ったのも、仙台時代のことだった。柳田は、喜善の没後、仙台ではなく、盛岡に出るべきだったと批判しているが、こうしてやってきた実験は、盛岡では実現できなかったにちがいない。

今年12月12日(土)から来年3月22日(祝)まで、仙台文学館で、「佐々木喜善と仙台」(仮称)が開催されることになった。同館では、すでに仙台市在住の昔話採集家佐々木徳夫の企画展を実施しているが、この企画展はさらに大きな歩みになるにちがいない。そこでは、喜善の人生をたどりながらも、彼が抱いていた未来への展望を検証することになるはずである。近在の方はもちろんのこと、多くの方が展示を見に来てくださり、口承文芸研究の歴史と未来を考えることができればと願う。

なお、企画展の観覧料は一般・大学生400円、高校生200円、小・中学生100円であり、期間中の講演会は12月12日(土)、2月13日(土)、文学サロンは1月11日(祝)に予定されている。合わせて、企画展をまとめた図録を販売することも決まっている。講演会・文学サロンの申込方法や図録の購入方法については、仙台文学館(仙台市青葉区北根2-7-1 TEL022-271-3020)にお尋ね願いたい。

(東京都)

## 事務局便り

### ○寄贈書籍

北海道立アイヌ民族文化研究センター編 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第5号』／北海道立アイヌ民族文化研究センター編 『鶴川地方に伝承されるアイヌの音楽についての調査研究 北海道立アイヌ民族文化研究センター調査報告書 5』／国立歴史民俗博物館編 『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集～第151集／神奈川大学日本常民文化研究所編 『民具マンスリー』第41巻8号～第12号／(荻原真子)『アジア遊学』121 勉誠出版／国文学研究資料館編 『世界文学の中の日本文学』第32回 国際日本文学研究集会会議録 2008 /小長谷有紀 『昔ばなしで親しむ環境倫理 ～エコロジーの心を育む読み聞かせ～』くろしお出版／日本民俗学会編『日本民俗学』256号／日本民話の会編「日本民話の会通信」No.204 /齋藤君子訳 ウラジーミル・プロップ著『魔法昔話の研究』講談社学術文庫

### ○事務局が移転しました

遅くなりましたが、2009年4月より、事務局が移動しています。御連絡などは下記事務局宛てにお願いいたします。電話ではつながらない場合もございますので、メールまたはファックスで御連絡いただくのが確実です。ご面倒をおかけいたしますが、2年間よろしくお願いいたします。

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 花部英雄研究室

TEL:03-5466-0224 (直通)

FAX:03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-MAIL: koshobungei@mail.goo.ne.jp

### ○第58回研究例会のお知らせ(詳細別紙)

時：2009年11月7日(土) 14:00から

場所：國學院大學 渋谷キャンパス 1号館4階 1402番教室

テーマ：「再話」論の射程

パネリスト：米屋陽一(本会会員)、藤久真菜(本会会員)、重信幸彦(司会・問題提起 本会会員)

---

## 日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。

日本口承文芸学会への入会を希望なされる場合は、事務局に連絡をするか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から用紙を取り込んでください。

入会金 1000円、年会費 4000円です。

郵便振替口座 00180-4-44864 をご利用下さい。

---